

琉球大学学術リポジトリ

特集に寄せて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2015-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 町田, 宗博, Machida, Munehiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32845

特集に寄せて

サンゴ礁の海は美しい。沖縄の慶良間諸島の色彩を「ケラマブルー」とも呼ぶそうだ。太陽の高さと角度、見る人間の視点によって、多様な色彩の景観を見ることができる。サンゴ礁の景観は、琉球弧からフィリピンやマイクロネシア、赤道を越えてメラネシアの島々まで広がっている。この広がりの中で、海水温度や光、塩分濃度や気候など、サンゴの生育条件の支える均一な条件を理解することもできる。このように、景観は、現象の視覚的概念であると同時に、広がり概念でもある。それゆえに“landscape”の訳語は「景観」のみではなく、場合によっては「地域」という用語が適切な場合もある。このようなことから、ドイツ語や英語の“landshaft”や“landscape”を初期のころには、「景域」と訳した研究者もいた。すでに「景観」の用語は、学問分野の中では定着しているが、近年、広がり概念を強調する意味から積極的に「景域」の用語が使われているのはおもしろい。また、本来の日本語の使用の中では、視覚的現象を表現する言葉として景色や風景が一般的であった。この人間の視点に立脚した「風景」の用語を鍵に、研究を推進なさる方々もおられる。研究者それぞれの問題意識に立って、眼前に広がる視覚的現象を多様な切り口から研究しており、これからも研究の蓄積が重ねられるのであろう。

なぜ景観を研究の切り口にするのがおもしろいのだろう。これは、景観をどのように意味づけるかという問いでもある。地理学の伝統的な考え方では、景観は地表で展開する人間の諸活動の表象としてとらえている。つまり、生活様式の表象であり、文化の表象でもある。それ故、地域や場所への入り口として景観は、重要な意味をもっている。景観の変化は、その内実の変化であり、その態様や要因に、さまざまな研究のひかりを照射できることがおもしろいのであろう。

本特集では、三篇の論考を得た。宮内久光・大朝礼子の研究は那覇市首里地区を対象とし、景観要素の色彩に着目し現地調査を実施した。この結果、二つの「地域の色」を抽出している。これが、「戦後沖縄の地域の色」と「伝統的な地域の色」であり、社会変動と景観行政により復活した色彩であることを明らかにした。地理学の先行研究を踏まえたもので、文化的背景と社会変動の異なる「戦後沖縄」を対象としているのが興味深い。

稲村務は、ユネスコのいう「文化的景観」の意味を、中国紅河ハニ棚田の「文化的景観」の世界文化遺産登録を契機に分析した。文書等の検討からイコモス、中国政府、ハニ族知識人、紅河州などのアクターの戦略を考察し、指定が住民に及ぼすものは何かを資源人類学的観点から明らかにしている。これらのことから、ユネスコの世界文化遺産における「普遍的価値」とは政治的妥協の結果であることを示した。著者の長年のフィールド経験をもとに、文化と政治を背景とした景観の意味を立体的にみせてくれる労作である。

宮城徹は、11世紀後期、イングランド東部に位置するクローランド修道院の所領景観をドゥームズデイブックの分析をもとに考察した。修道院の所領地域は、集落とその周辺の広大な農耕地、牧草地、放牧地などの農業や牧畜により形成された景観が広がっている。これを土地経営の観点からみると、複数の人々からの土地の寄進を通じて形成された修道院の散在所領の存在があり、一つの村落を複数の領主が分割支配する「一村多領主型」の地所が卓越することを明らかにしている。「一村」の領域と認知される景観に対して、史料分析から、その内実に切り込みをいれた論考である。

以上今回は、地理学、人類学、歴史学の各分野からの成果を得ることができた。この特集が、本専攻課程における議論のはじまりとなれば幸いである。(町田宗博)